

新羅淨土教の展開(二)

——十念論に着眼して——

梯 信 暁

朝鮮半島において阿弥陀仏經典の研究が隆盛を極めるのは、新羅が半島を統一する七世紀の半ば過ぎからのほんの数十年前である。この間に輩出する諸家のうち、著作等によってその思想を窺うことができるのは、元曉(六一七～六八六)・法位・義寂・玄一・憬興(一六八一)の五人である。新羅淨土教思想史の研究は、彼らの思想的位置づけを明らかにすることからはじめなければならぬ。しかるに、この五人は年代的にあまりにも接近しすぎていて、前後関係を把握することが極めて困難である。元曉・法位の説が玄一・憬興の著作中に引用されていること、そして、元曉『無量寿經宗要』・

法位『無量寿經義疏』には『成唯識論』および慈恩以降の法相宗の典籍の依用がなく、義寂『無量寿經述義記』・玄一『無量寿經記』・憬興『無量寿經連義述文贊』には見られるということから、元曉・法位は義寂・玄一・憬興よりも先輩であることがわかる程度である。

そこで、いくつかの教理的問題について、五人の見解をくらべてみて、そこに一定の流れを見出すことができれば、彼らの思想的位置づけを知る手がかりとなるのではないかと考え、ここにその第一弾として、十念論に焦点を絞って新羅淨土教の展開の側面を見てみようと思うのである。

「十念」とは、周知の如く『無量寿經』上巻の第十八願文、下巻の三輩段下輩の文、『觀經』下下品の文等、極樂往生の爲の因行を説く中に出る文言であるが、具体的な意味が掴み難く、古来様々な解釈がなされているのである。

元曉の見解は『無量寿經宗要』の下輩十念を明かす一段に示されている。元曉は『無量寿經』下輩の十念に、顯了義・隱密義の二義を見る。隱密義の十念とは、初地以上の聖者所生の純淨土に対する因で、『弥勒問經』の慈等の十念がこれにあたる。顯了義の十念とは、地前凡夫所生の土に対する因で、『觀經』下下品所説の十念がこれにあたる。そして、こ

の『無量寿経』下輩の十念は、隱密・顯了の二義を具す、と言うのである。即ち、『觀經』下下品の十念は凡夫の所發であるのに対して、『無量寿経』下輩の十念は凡夫と聖者の両方に通ずる、と見ていたことがわかる。

法位は、『無量寿経義疏』卷上、第十八願文の釈中に十念論を展開する。法位によると、十念には「十法起十念」と「二法起十念」とがあり、「十法起十念」とは『弥勒問經』に説かれる聖者所發の慈等の十念、「二法起十念」とは『觀經』下下品に説かれる凡夫所發の称名中心の十念である。また彼は、第十八・十九・二十願をそれぞれ上品・中品・下品の往生を誓う願とする。したがって、第十八願の十念は、上品人の所發ということになる。法位はこれを「十法起十念」と解し、称名の十念ではないと言っている。

『無量寿経』の所説に聖者所發の十念を認める点で、元曉・法位の説には一脈相通するものがあるが、『觀經』下下品の十念に対する見解には、両者に相違が見られる。

元曉は『觀經』下下品の十念を釈するにあたり、『略論安樂淨土義』からいわれる渡河譬の文を引用して、

若念仏名、若念仏相等、無間念仏、乃至十念、如是至心、名為十念、此是顯了十念相也。

と言う。仏の相好を念ずるということ、仏名を念ずるということと並べあげているのであって、元曉が『觀經』下下品

の十念に觀想念仏を含めて考えていたことがわかる。

一方、法位は、次のように言う。

或念仏名字、或念仏相好、或念仏光明、或念仏功德、或念仏智慧、或念仏本願。此言不能念者、不能念相好・功德等。又不能念仏之法身、不生不滅、無生念觀也。言若不能念應称無量寿仏者、此明唯称名号。此称名觀易成就。言具足十念称仏名者、口称心念要須滿十。

「或念仏名字、或念仏相好……」とは、元曉が用いたのと同じ『略論安樂淨土義』の説であるが、『觀經』下下品に「不能念」とあるのは、仏の相好・功德等を念ずることのできない者を指すのであって、ここの十念はそのような者に対して示された称名の十念である、と言う。即ち、元曉がこの十念に含ませていた「仏相好」を念ずるといふ觀想念仏の部分を、法位は除いていることがわかる。法位は名号を称することを「称名觀」と言い、また十念を「口称心念」と言って、この十念から心念を排除するものではないが、元曉より口唱の称名に重点を置いていることは明らかである。法位は元曉よりも十念の易行性を強調していると考えてよからう。

次に義寂の見解を見てみたい。義寂は、『無量寿経述義記』卷中で、第十八願文を釈するにあたって、まず『觀經』下下品の文を引用し、つづいて、十念を定義して、

經十念頃、専称仏名、為十念也。此言念者、謂称南無阿弥陀仏、

經此六字頃、名一念。

と言う。これは法位以上に口唱の称名を強調するものと言えよう。第十八願の釈中に、何のことわりもなく、まず『觀經』下下品の文を引用していることから、義寂は第十八願の十念と『觀經』下下品の十念とを同じものと解していることが窺われる。この直後、第十九願の釈中に、

第十九、撰取修德欲生願。前者苦逼不遑念仏、故唯專称十念得生。此即容預可兼余善、故具修得方得往生。

と言うが、この「前者」とは第十八願の機を指すものであり、「苦逼不遑念仏」というのは『觀經』下下品に出る文言である。義寂は第十八願を下品人の往生を誓う願と見ていたと考えてよからう。法位とは見解を異にするところである。

また、『弥勒問經』の十念については、

此說專心称仏名時、自然具足如是十念。非必一一別緣慈等、亦非数彼慈等為十。……又此十念、雖凡所起、非凡夫事。故云非凡夫念。……不可以非凡夫念言、高推上地。

と、慈等の十念は専心称名すればその中に自然に備わると言う。また、『弥勒問經』に「非凡夫事」等とあるのは、凡夫の起こす十念ではあるが、「凡夫わざ」ではないということを示すだけのもので、慈等の十念が聖者の所発というわけではない、と主張する。つまり、元曉・法位が、「称名を含む凡夫の十念」と「聖者所発の慈等の十念」という、二種の十

念をもつて、『無量寿經』『觀經』の十念を解するのに対し、義寂はこれを「称名の十念」の上に一本化するのである。

義寂がかくも称名を重視することの理由としては、既に指摘されたように、彼が善導の影響をうけていることがあげられる。『無量寿經述義記』巻中に、

諸仏所証、平等無二、実如所問。若以願行東以（一）来収？、非無因緣差別。然弥陀世尊、本發深重誓願、以光明名号、撰化十方。但使深信專心求念、上尽一形、下至十念、以仏願力、易得往生。是故經中偏勸向彼。

と言うのは明らかに善導の『往生礼讃』の依用である。ここに「上尽一形、下至十念」とある句は、『往生礼讃』では「上尽一形、下至十声一声等」となっている。『無量寿經』第十八願の「乃至十念」の意味を明かす釈で、後に法然が「念声是一」とよんだ有名な説である。第十八願の十念が称名の十念であることを明言した義寂ではあるが、心を全く排除してしまふことはできなかったのか、「念一」声」というところまでは認めることができずに、意図的な読み替えをしたものと思われる。

次に玄一であるが、彼は法位の説をほぼ踏襲するのみで私見を示していないので、ここでは考察の対象から除外する。

最後に憬興の見解を見てみたい。『無量寿經連義述文贊』巻中、第十八願文の釈中、逆謗除取を論じたところに、

但誹謗正法罪既深重、於無數劫受苦報故、仮具十声必不得生。

と、「十声」ということばを用いているので、第十八願の十念を称名の十念と考えていたことは明らかである。また、彼は第十八・十九・二十願をそれぞれ撰上品・中品・下品の願とする。これは法位と同じであるが、

有説、「此経十念、依十法而念。非仏名故。即弥勒所問十念是也。」

此亦不然。彼経十念即非凡夫。必非上品三生所能修故。今即還同

観経十念。上輩亦修十念。

と、法位説を否定して、第十八願の十念は『観経』下下品の十念と同じく、凡夫の所発であると主張する。そして『弥勒問経』の慈等の十念は、凡夫の所発ではないので、上品人といえども発することはできない、と言う。第十八願の十念から慈等の十念を排除するのである。

第十八願の十念と『観経』下下品の十念とを、共に凡夫所発の称名の十念とするところは、義寂・憬興の共通点である。しかるに、義寂は第十八願の十念を下品人の所発と考え、しかもこの中には『弥勒問経』の慈等の十念が備わっていると言う。これに対して、憬興は第十八願の十念から慈等の十念を排除することによって、この十念の易行性をより強調する。その上に、これを上品人の所発とするのであるから、九品の全体を凡夫とみなしていることがわかる。憬興は義寂に比べて九品の行位を一段と低く評価し、それによって

『無量寿経』『観経』が凡夫のみを対象として説かれた經典であることを強調しようとしていることが窺われるのである。

以上、新羅諸家の十念論を概観してきたのであるが、元曉よりも法位が、法位よりも義寂が、そして義寂よりも憬興が、十念をより易行の立場で捉えていることがわかった。これによってこの四人の著作の成立順序が確定するわけではないが、易行性をより強調する、或いは、凡夫救済をより重視するというような方向性は、浄土教思想の流れとしては極めて自然なものである、と考えることは誤りではなからう。

このような観点から、如上の考察によって、新羅浄土教の思想的展開の側面を窺うことができたものと考えられるのである。即ち、元曉・法位においては、『無量寿経』所説の十念の一分に聖者所発の慈等の十念を含ませ、これと凡夫所発の称名十念とを別に捉えていたのであるが、義寂は、『無量寿経』第十八願の十念を凡夫の所発と捉え、十念を称名の十念に一本化する。これは、善導の見解を持ち込んだことによるのであるが、これによって十念の易行性を強調するという点において、新羅浄土教は飛躍的進展を遂げたものと解せられる。憬興の立場もこれと同一線上にあって、義寂の立場をさらにもう一步進めたものと考えられるのである。

〈キーワード〉 元曉、法位、義寂、憬興

(大谷女子短期大学専任講師)